

「心（いのち）を聴くということ」

■今月は、私が出会った一冊の本「あふれでたのはやさしさだった」（奈良少年刑務所 絵本と詩の教室：著者 寮 美千子氏）について紹介します。

「父と母から教わったこと」

「あんたなんか産むんじゃなかった」と言う 母の言葉
ぼくを湖に落として殺そうとした 父の行動

小さい頃から ぼくは

「生きてはいけない人間」だと 教えられました

入水、首吊り、薬の大量服薬…

病院のベッドで 母からかけられる言葉は

「まだ生きてたん？ 死ねばよかったのに」でした

大人は 誰も助けてくれなかった

ぼくには 生きる意味も価値もありません

いまでも 考えは変わっていません

ぼくは 必要のない人間です

ただ 生きていくだけです

これからも ずっと



左の詩は、奈良少年刑務所の中で17歳の少年が書いたものです。

寮 美千子先生は、刑務所に入るような人が、がさつで凶暴な人だろう。何を考えているかわからない恐ろしい人に違いないと、漠然とそう思っていたようです。

ところが奈良少年刑務所で出会った少年たちは全く違っていった。想像を絶する貧困の中で育ったり、親から激しい虐待を受けたり、学校でいじめられたり。助けてくれる人が誰もいなかった。加害者になる前に被害者であった子どもたちだったと。

心を固く閉ざしている少年たちに、詩を書くことを進めていくうちに、少しずつ話を聞かせてくれる関係を作っていたそうです。

やがて彼たちが、心の扉を開けた途端、溢れ出たのは優しさだったと語っています。重い罪を犯した人間でも、心の底に眠っているのは優しさなんだと実感されたそうです。

人は、表面だけを見て判断できません。奥底に隠された様々な思い・感情があります。

その人の歩んできた道（物語）を聴く事は、医療、看護の世界でも必須です。

病気を知ると同じくらい、いやそれ以上に、その人の人生の歩み、過去の歴史を識る事は、もっと大事な事なのかも知れません。

人の話を聴くと言う事は、たやすいことではありません。人には言葉にならないメッセージがあります。

そして、その一つ一つに丁寧に寄り添い続けている姿勢こそが、信頼を得ていくのだと思います。

人とかがかわることが中心の医療者だからこそ、日々自身を磨きながら、共に成長していく喜びを実感できる職場でありたいものです。

季節の変わり目、体調コントロールをしながら、頑張ってくれている皆さんに感謝します。

今月もお疲れ様でした。

2023年5月10日

呉静恵

